2022.10.15
Vol. 67

北海道サケネットワーク Newsletter

発　行 阿部周一
事務局 高橋壽一 札幌サケ協議会
〒006-0839
札幌市手稲区曙 9 条 1 丁目 10-25
Tel/Fax：011-681-4268
E-Mail：jaytaka@carrot.ocn.ne.jp
URL：http://salmon-network.org/
編　集 寺島一男
E-Mail：tera2112@potato.ne.jp

サケが遡上するシーズンになりました。大雪山の初冠雪が例年になく遅れましたが、街角の木々はテンポを早め少しずつ色づきはじめました。編集者の事情で予定遅れの NL になりました。タイミングを逸した記事もあり、深くお詫びいたします。

INFORMATION

2022 年度総会終わる

2022 年度北海道サケネットワークの総会及び北海道サケ会議が、5 月 28 日(土)TKP 札幌ビジネスセンター赤れんが前(5F)で開かれました。

出席会員(正会員・特別会員等)は、総会 14 名、サケ会議 14 名でした。

総会(13 時 30 分~14 時 30 分)は、高橋壽一事務局長が司会を担当。阿部周一代表の挨拶のあと議事に入り、報告事項、次いで協議事項の提案と審議、最後に情報交換が行われました。

報告事項・協議事項

報告事項では、会員の現況に続き、2021 年度活動として ①書面協議による総会とオンラインサケ会議 ②会報の発行 ③ホームページの編集 ④ニュースレターの発行（4 回） ⑤サケマス情報プラットホームの配信状況が報告されました。

協議事項では、①2021 年度収支決算報告・会計監査報告②2022 年度活動計画案 ③2022 年度収支予算案 ④2023 年度総会・サケ会議の標津町開催 ⑤2022 年度役員の確認（非改選期）がなされ、審議の結果いずれも異議なく、提案通り承認されました。なお、2023 年度総会・サケ会議の時期や内容については、今後、標津サーモン科学館の市村館長との協議により検討を進めて行くことになりました。

情報交換では、①大雪と石狩の自然を守る会・あさひかわサケの会 ②標津サーモン科学館 ③豊平川さけ科学館から、活動の現況報告がありました。

北海道サケ会議

引き続き、北海道サケ会議（14 時 30 分～17 時）が開かれました。阿部周一代表の挨拶 に引き続いて、河村博顧問を司会に「気候変動下のサケ～適応的生産と利用に向けて」をテーマに講演と総合討論が行われました。

講演は、増殖、環境、水産経済に関わって以下の 3 課題が話されました。 ①「衛星を利用した持続可能なサケ資源生産支援」齊藤誠一 氏（北海道大学極域研究センター） ②「成長の生理学から見たサケマスの生残と成熟」清水宗敬 氏（北海道大学北方生物圏フィールド科学センター） ③「北海道のサケ産業の動向」濱田武士 氏（北海学園大学経済学部）

総合討論

総合討論では、増殖と環境に関連して、降海サケ幼稚魚の生残と沿岸環境、衛星データを用いた降海時期の沿岸環境収容力の時空間的評価、外洋サケの系群識別、成長モニタリングと資源量の把握、などが話題になりました。水産経済に関連して、国内サケマス消費の現状、秋サケの課題、道内サーモン養殖の現状と課題、などが話題になりました。

Topics

学ぼう川のはたらき
―旭川で学習講演会―

あさひかわサケの会が、大雪と石狩の自然を守る会と連携して毎年開催している学習講演会「学ぼう川のはたらき」が、7 月 17 日午後、旭川市神楽公民館第 1 学習室で行われました。

講師は当サケネットワークの顧問(元・北海道立水産孵化場長)の河村博さんで、『アジア特産のサケで身近な生きものサクラマス(ヤマベ)のくらしを育む川のしくみ』と題して話されました。

サクラマスのくらしと生活史変異から、サクラマスがくらす河川環境の季節的な利用と特性など、多岐の内容にわたって興味深い話しがなされました。この数年、旭川を流れる石狩川とその支流で、数多くののサクラマスが見られるようになったこともあって、参加した市民は興味津津に聴き入っていました。

EVENT NOW

カムイチェプ・ノミ
―秋晴れの忠別川で―

コロナ禍の影響もあってか、休日にもかかわらず人影がめっきり少なくなった旭川市内の神楽岡公園で、久しぶりに元気のいい子どもたちの歓声が上がった。

35 回を迎えたサケを迎える集い「カムイチェプ･ノミ」が、9 月 25 日午前、大雪と石狩の自然を守る会・あさひかわサケの会・チカップニアイヌ民族文化保存会等でつくる実行委員会によって実施された。

シロヤナギやハルニレ、カツラなどの巨樹が悠々と枝を広げる公園の一角、忠別川河川敷にイナウの並ぶ祭壇が設けられ、アイヌの伝統文化である儀式が執り行われた。ムックルの演奏や主催者のあいさつ、市長のメッセージが披露された後、数十人の市民が見守る中、集まった子どもたちが主催者が企画したさけ○×クイズに興じた。大人も戸惑う 10 問の問いに 8 ～9 問正解する子が多く出て、参加者の目を丸くさせた。

ヤマベたちの守り神
―その 1 －

河村　博

今号からタイトルと内容が変更になりました。これまでの「サクラマスとわたしたち」シリーズは、引き続き会員の「大雪と石狩の自然を守る会」広報誌「ヌタプカムシペ Vol.173 以降」に掲載されます。興味をお持ちの方はこちらもご覧くださると幸いです。

ふたつに分けた訳は、サクラマス自身と人々との関わり様について、他の生き物たちも主役に登場させたいとの著者の強い思いで、特に本誌で「ヤマベたちの守り神」としてヒグマのことを記載することにいたしました。

著者とヒグマ（キムンカムイ、山親爺）の関係は複雑で、最初は恐ろしい生き物、次にはどうしても乗り越えなければならない相手、そして何となく親しみ感がわいてきた愛すべき個体へと移り、今では共に生きる森の王者に変わりました。

なぜヒグマがヤマベたちの守り神なのかは、この後明らかにされますが、その前に著者とヒグマたちの関係の変化を歴史的にご紹介いたしましょう。

恐ろしい生き物　ヒグマ

大学入学で初めて大阪から北海道に移り住んだころ、ヒグマに関する情報はヒト対クマの壮絶な記録でした。北海道開拓時代、クマの圧倒的優位な関係の時代背景のなかでも、留萌地方苫前の三毛別（さんけべつ）で起きた事件は特に悲惨な殺傷で心に残り、胸が痛みました。このことは吉村昭さんの小説「羆嵐」で読むことができます。実に恐ろしい個体がいるものと恐怖したことを今でも思い出します。

乗り越えるべき相手　ヒグマ

大学院を中退して北海道立水産孵化場に勤務した職場は「鮭鱒科」であり、そのころサクラマスの遡上を阻害するダムに魚道を整備する業務がありました。「通路整備事業」です。この事業では、魚道を付けるダムの選定や整備後の効果評価を調べるため、山奥の砂防ダムを同僚の坂本博幸さんと訪れたものです。檜山地方の小川の調査では、つい最近釣り人がクマに襲われて命を落とした場所でもあり、かなり緊張しつつ狭い林道を歩いて川までたどりました。ガサガサの音で一目散に車まで逃げ帰ったことでした。今では決してこのような行動はとりません。

この時代のヒグマは、ただただ音や声を出し続けて避ける「おっかない、時には命を奪われるかもしれない」相手だったのです。続きは次号になります。実はヒグマはかしこく、時には人間臭い行動を取る生き物だったのです。

（サケネットワーク顧問・元北海道立水産孵化場長）